

## 第一部 大元神楽を舞う (13:10~15:20)

### 【大元神楽とは】

大元神楽は、島根県邑智郡から那賀郡にかけての山間部に残されている神楽で、昭和五十四年には、国の重要無形民俗文化財に指定されている。明治以降に急速に広まった、華やかな衣装でテンポの早い舞を行う「八調子」の石見神楽とは違い、地域に古くから伝わる、ゆったりとしたテンポに合わせて、優美な所作で魅せる「六調子」の神楽であるのが特徴である。七年に一度の式年祭では、厳粛な神事である藁蛇を用いた神懸かりの託舞も奉納されるため、他地域で演ずる機会は少なく、今回の大阪公演は非常に貴重な機会である。

### 【出演団体の紹介】

市山神友会

所在地 島根県江津市桜江町市山地区

会長 本山徳幸

市山神友会は、大元神楽に欠かせない希少演目の復元や神楽歌口上書の発行など、旺盛な活動を行っている伝承団体である。この地域の神職に神楽研究で有名な牛尾三千夫氏や、笛の名手でありながら神楽研究を行った竹内幸夫氏がいたことなどから、伝統を守るという意識が強く、大元神楽の伝承の中心地となっている。

### 【出演者】

太鼓口 大胴 中西一郎 大胴 竹内修二 大胴 湯浅泰男

小太鼓 田中兼司 小太鼓 山本周平 笛 石津久明 鉦 森野順

御座 舞 森野茂 大胴 湯浅泰男 小太鼓 石津久明 笛 山本周平 鉦 田中兼司

鍾馗 神 森岡友昭 鬼 宇都宮将

大胴 湯浅泰男 小太鼓 山本周平 笛 竹内修二 鉦 田中兼司

五龍王 青躰青龍王 森下圭三 赤躰赤龍王 田中兼司 白躰白龍王 森野順

黒躰黒龍王 本山徳幸 五郎使 森野茂 黄躰黄龍王 湯浅泰男

文撰博士 石津久明

大胴 中西一郎 小太鼓 山本周平 笛 竹内修二 鉦 森岡友昭

## 【市山神友会による神楽公演】

ステージには、学生企画委員が作成した竹の枠に、市山神友会が用意してくださった五色の切紙を付けて製作した天蓋が吊るされている。大元神楽は、必ず天蓋の下で舞わないといけないと伝えられており、また、天蓋は舞う際の目付の役割も果たす。市山神友会に協力いただき、舞台は最高のものが整った。



まずは、<sup>どうのくち</sup>「太鼓口」。普段は四つの大胴で編成されるが、今回は特別に三つの胴での披露となった。静まり返った会場に笛の音が響き、大小の太鼓、鉦がリズムを刻んでいく。神々を呼び降ろす神歌の唱和も合わさって、まるでオーケストラの交響曲を聞いているような感覚である。中盤には、それまで太鼓を叩いていた演者が立ち上がり舞い踊る場面もあり、単なる演奏ではない、神楽独特の演出には耳目を驚かされた。神々を歌い降ろす芸能の極致を見た気がする。

続く「御座」では、若い舞手が登場し、半畳よりやや長い「ゴザ」と和鈴を持って、五方を厳かに拝む。後半の飛びの段では、「ゴザ」を前後に動かしながらその上を何十回も飛び続ける曲芸的な技が披露された。観客は、力一杯飛ぶ演者を拍手や大きな声援で囃し、会場は一番の熱気につつまれた。そうした熱演のおかげか、舞台での公演であるにもかかわらず観客から御花(舞人への祝儀)が出たのは、異例なことで、現地での奉納に近い雰囲気を作れたのは良かったと思う。

休憩を挟んだ「鐘馗」は、「素戔鳴尊(鐘馗大神)」が、茅の輪と宝剣をもって日本へと攻め込んできた「悪鬼」を退治するという能舞である。「悪鬼」と



「素戔鳴尊」が、幕を挟んで対峙し隠れ合う。単純だけれどもスリリングな駆け引きは、如何に上手く見せるか難しいところである。なかでも、「鐘馗」が「悪鬼」にとどめをさすシーンは、見ているこちらにも手に汗握る見せ場を作ってくれた。鬼の舞は、腰を常に低く微動だにせず、しばらくの間静止することが求められるため、これも若い二人が熱演し、会場は喝采につつまれた。



最後の「五龍王」は、舞を主体とする多くの演目とは違う台詞を主体とした演目で、長い口上をよどみなく言うところが見ものである。ここでは、長台詞を流暢に言い立てる、何十年も研鑽を重ねてきたベテランたちの迫りに圧倒された。五人の兄弟の合戦の場面では、実際に喧嘩をしているかのようなバチバチしたしばきあい展開され、争いを調停しにきた文撰博士は、難解な暦やト占の知識を織り交ぜた難解な台詞を一字一句間違えず言い立てる。神楽は、奏楽と舞だけではなく、豊穡な語りの世界も持っているということを存分に示してくれた。



今回の研究公演は、市山神友会の皆さんも非常に気合いが入っており、ある意味、現地で拝見させていただいた時以上のものを披露していただいたと思う。四演目を通して、大元神楽が伝える「奏楽」「神事舞」「能舞」「口上」それぞれの粋を感じられた公演だったのではないだろうか。

また、この公演が、普段その演目を担当する機会がなかなか廻ってこなかった若い傳承者たちにとって、新たな演目を披露する機会となったことを嬉しく思う。微力ながら、次の世代へと傳承を伝えていく一助となったのであるならば幸いである。

平成 26 年度学生企画委員  
総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本歴史研究専攻  
鈴木昂太